

司式: 中川 真明  
奏楽: 吉田千鶴子

前奏: 「神のひとり子、主なるキリスト」(D. ブクステフーデ)

招詞: 初めに、神は天地を創造された。神は譚われた。「光あれ」(創1:1,3)

讃美歌: こどもさんびか 12(『21』351「聖なる聖なる」)

#### 交読詩編 100

- 01 【賛歌。感謝のために。】全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。
- 02 喜び祝い、主に仕え/喜び歌って御前に進み出よ。
- 03 知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民/主に養われる羊の群れ。
- 04 感謝の歌をうたって主の門に進み/賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。
- 05 主は恵み深く、慈しみはとこしえに/主の真実は代々に及ぶ。

朗読聖書: マルコによる福音書 4:21-25

#### ◆「ともし火」と「秤」のたとえ

- 21 また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。
- 22 隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。
- 23 聞く耳のある者は聞きなさい。」
- 24 また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。
- 25 持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

#### 祈祷

愛と恵みに富み給う父なる御神さま、あなたの尊き聖名を賛美致します。どうぞ、御国を来たらしてくださいませように。

降誕節第四主日の今朝、私たち一人ひとりの名前を呼んで教会へと集めてくださり、またライブ配信を通して礼拝をお献げできますことを心から感謝申し上げます。特に今日は、冬の全体礼拝として、小さな子供たちから大人の方々まで、共に集って礼拝をお献げできますことを重ねて感謝申し上げます。教会学校に通う児童生徒たちが、また、保護者の方々が、神さまの愛と恵みに満たされ、また、共同体としての教会の豊かな交わりに加えられ、教会の大切な肢として繋がっていくことができますように祈ります。礼拝後にもたれます交流会の上にも、神さまの恵みが豊かにありますように。

先週の主日、私たちは笠原牧師を通して御言葉を頂き、夫々の場へと派遣されました。顧みます時に、私たちの歩みは神さまの思いから離れてしまったり、この世に流されるものであったり、あるいは自己中心的なものでありました。私たちがいかに弱く小さなものであるか改めて知らされました。しかし、こんなに弱く小さな私たちをも、「善し」とされ、愛していただき、導いてくださる神さまの恵みと憐れみを感謝致します。悔い改めて新たなスタートを切ることができますようお導きください。

本日、与えられました二人の説教者を感謝致します。御言葉の取次ぎをしてくださる大谷昌恵牧師、佃 雅之牧師の上に聖霊が臨み、神さまの恵

みと祝福に満たされますように。また、説教に与る私たち一人ひとりの心を開き、御言葉の種をしっかりと受け止めることができますように。そして、播かれた御言葉の種が豊に実って行きますようにお導きをお願い致します。

能登半島地震と豪雨災害で被災された方々のために祈ります。愛する方を失った方々、家や仕事、通常の生活を失ってしまった方々の上に、神さまの御慰めとお支えをお祈り致します。地震から二年が経ちましたが、その後の豪雨や大雪により、また地形的な影響で復旧が進んでいない地域が多くあります。避難先で不自由な生活を送っている方々、厳しい状況の中で復旧作業に携わっている方々の上に神さまの御導きをお祈り致します。また、東日本大震災で被災された方々のために祈ります。震災からまもなく15年になろうとしています。今もなお、悲しみや苦しみの中にある方々がたくさんいらっしゃいます。また、福島第一原子力発電所の事故により故郷を奪われた方々、放射能汚染の中で暮らさざるを得ない方々もたくさんいらっしゃいます。その方々の上に、神さまの御慰めとお支え、励ましをお祈り致します。そして、隣人である私たち一人ひとりが、その方々のことを覚え、共に生きていこうという思いを込めて、為すべき支援を行なっていきますように神さまのお導きをお祈り致します。

本日、夫々の被災地の教会で献げられる礼拝の上に、また避難先で献げられる礼拝の上に、神さまの特別な御顧みがありますように。

世界ではウクライナ、ガザを初め至る所で戦争が続き、命が大切にされない状況があります。一人ひとりの命や権利が重んじられ、主の平和シャローームが実現しますように。私たち一人ひとりが、平和を実現する者として歩むことができますように。

イエスさまはこの世で弱い立場にある方々の中に進んで入っていらっしやりに、共に歩まれました。私たちも弱い立場の中にある方々、差別や抑圧の中にある方々と共に歩み連帯して行く力をお与えください。

今日の礼拝を覚えながらも様々な事情で教会に集うことができない方々のために祈ります。神さまの特別な御顧みとお支えがありますように。

この溢れる感謝と願いを尊き主、イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

賛美: こどもさんびか 61(『21』105「ガリラヤの村を」)

#### 子どもへの説教「大切なことを忘れずに」 大谷昌恵

皆さんは家に居て暗くなったら何をしますか? 電気をつけますよね。電気をつけてご飯を食べたり、本を読んだり、お風呂に入ったりします。電気はたくさんを明るくできるように、なるべく高いところに着けます。この礼拝堂にも、今、電気が着けてありますけれど、みんな高いところに着いています。そうすれば、これだけの電気でも礼拝堂の中を全部明るくすることができます。

イエスさまの時代には、まだ電気がありませんでしたから、油の入った器に火をつけて「ともし火」にしました。「ともし火」とはランプのことですから、ランプをつけて周りを明るくしました。このランプをどこに置くかと言ったら、やっぱり部屋の中をなるべくたくさん明るくするために、少しでも高い所に置きました。そのランプを置くところが「燭台」です。「燭台」の上に置けば部屋の中を明るくすることができます。折角つけたランプをベッドの下に置く人はいません。

「升」というのは、本当は穀物などの量を測るための四角い箱のようなものですが、ランプの明かりを消すときにも使いました。折角つけたランプの灯りを「升」の下に入れてしまえば、明かりは消えてしまって、また真っ暗になってしまいます。イエスさまは、「暗闇を照らす灯りは、その光が行き渡る燭台の上に置くのですよ」と教えてくださっています。

イエスさまが仰る「ともし火」というのは、実はイエスさまご自身のことで、皆さんはクリスマスのことを覚えていますよね。クリスマスには“罪に満ちた暗闇のこの世に光をもたらすために神さまがこの世に与えてくださったのが救い主イエスさまだ”というお話を聞きました。ですから、ここでイエスさまがお話してくださっている「ともし火」は、イエスさまのことなんです。イエスさまは私たちを照らしてくださる光です。私たちが生きているこの世界には、辛くて悲しいことがたくさんあります。どうしていいかわからなくて、心の中が真っ暗になってしまうこともあります。そんな時でも、私たちを明るく照らす本当の光であるイエスさまを見上げて歩いて行くことができれば、その暗闇から救われることができます。

イエスさまは、この時もう一つ、お話をなさいました。それは「何を聞いているかに注意しなさい」ということでした。私たちがイエスさまの話を聞くときに、心から信じてイエスさまの話を聞くことができるならば、神さまは、その人にたくさんのお恵みをお恵みを与えてくださいます。でも、「イエスさまのお話って本当なのかな？ 私は信じないは」、という人にはお恵みも愛もなかなか注いでくださりません。大切なのはイエスさまのお話を信じて聞くことです。神さまのお話を信じて、お友達やお家の人に優しくできる人は、神さまからたくさんのお恵みも頂けるようになります。

私たちが生きているこの世界にはたくさんの方がいます。皆が神さまやイエスさまのことを信じて生きて行くようになれば、戦争もなくなって、平和で素晴らしい世界がやってくるでしょう。でも今は、まだ、そうではありません。神さまを信じることのできない人もたくさんいます。世界中で戦争が起こって、そのために死んでしまう人や悲しい思いをする人はたくさんいます。だから今、イエスさまのお話を聞いて、イエスさまのことを信じて生きて行くことのできる私たちは、「光」であるイエスさまを高く掲げて、毎日の生活を歩んでいきましょう。そうすれば、そのイエスさまの「光」に気が付いて、イエスさまのお話を聞くようになる人がもっと増えてくることでしょう。そして、いつか、この世の中から戦争や争い事がなくなって、皆が笑顔で生きることが出来る毎日がやってきます。

神さまのお話を、イエスさまを通して聞いて、そのことを心から受け入れる人には、それまで以上に神さまのお言葉が与えられるでしょう。私たちにとって大切なのは、いつでも高く掲げられた「光」としてのイエスさまを見上げながら歩いていくこと。そして、神さまのお言葉をしっかりと聞いて、神さまの仰る通りに歩いていくことです。その大切なことを、いつも忘れずに、私たちは、神さまのお言葉を信じ、その愛とお恵みに感謝して生きていきましょう。

お祈りをしましょう。お祈りの姿勢をしてください。

神さま、いつも私たちを愛してくださいありがとうございます。私たちは、光として私たちの所に来てくださったイエスさまを見上げて毎日を生きています。神さまのお話を信じて、神さまに喜んで頂けるような子供として毎日を過ごしています。どうか神さま、そのような私たちが、これからも神さまのお言葉をたくさん頂いて、感謝して生きていけるようにし

てください。祝福とお恵みを豊かに注いでください。

この感謝と願いのお祈りを、救い主イエスさまのお名前を通してお献げ致します。アーメン。

## 子どもの祝福

讃美歌:472「朝ごとに主は」

説教「ともし火をかかげよ」

佃 雅之

今日の箇所には「聞きなさい」という言葉が繰り返されています。キリストが弟子たちに何より大切なこととして求められたのは、「聞くこと」であったことが分かります。聖書で言う「聞く」とは、「神に心に向け、神の語る言葉を受け入れ、その言葉に信頼して生きようとする姿勢」を意味しています。ですから、本当に「聞いているかどうか」は、聞いた者のその後の態度によって明らかになります。私たちは、人生の経験を重ね、信仰生活を積み重ねる中で、いつの間にか、「それはもう、知っている、分かっている」という姿勢を身につけてしまうことがあります。今、キリストは「聞きなさい」と語りかけています。「あなたがたは、これまで何を基準として生きてきたのか、御言葉をどのように聞いて来たのか、そして、その聞いた御言葉にどのように向き合ってきたのか」、今、問われているのです。

今日の御言葉は、私たち一人ひとりに向けて語られているだけでなく、教会全体にも語られています。「私たちが教会として、どのように御言葉を聞き、どのように応えていくのか」をも問うものです。「あなた方は一つとなって福音を宣べ伝えることに励んでいるか。キリストの証人として、本当に生き生きと福音を証する生活ができていくか。」と問いかけておられるのです。

今日の御言葉の中で、主は、「ともし火」を喩えに用いて語り始められます。「ともし火」は「御言葉」であり、「イエス・キリストご自身」を示す言葉だと考えられます。「ともし火」は、それ自体が輝くことだけを目的としているではありません。その光によって周りが照らされることに意味があります。だからこそ、「ともし火」は、隠された場所ではなく、周りを照らすことができる場所に置かれるものなのです。

なぜキリストはこの時、「ともし火をもって来るのは升の下や寝台の下に置くためだろうか」と問われたのでしょうか。キリストの目には弟子たちが「ともし火」を隠しているように見えていたからです。「升」というのは、本来、物の量を測るための道具ですが、「ともし火」を覆って消すためにも使われていました。また、「寝台」というのは、今で言うベッドのことですが、「ともし火」を使わない時には、火を消して寝台の下にしまっていたそうです。この時の弟子たちは、「ともし火」を消そうとしていた、隠そうとしてしまっています。それは弟子たちの心が、まだ恐れに囚われていたからです。キリストに従うということは、この世と衝突することでもありました。キリストの教えを語り行うことで人々から理解されず、排除される。時には、命の危険に曝されることさえ、現実の恐れとして迫っていたのです。

キリストは、「ともし火」を隠そうとする弟子たちの心を見抜いています。御言葉を聞きながらも、生き方を変えることにどこかで躊躇い恐れを抱いていたのです。「人からどう思われるだろうか、関係が壊れてしまわないだろうか、このような私が御言葉に生涯従い行くことができるだろうか。」様々な思いの中で知らず知らずの家に、「ともし火」を「升」で覆い寝台の下に置いてしまう。そのようなことが、決して他人事ではなく、私たち自身にも起こり得るのです。

キリストは恐れの中にある弟子たちを励ますために言葉を続けられます。

「隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。」キリストが真の救い主であるという事実は、今はまだ隠されています。弟子たちはキリストが十字架にかかり、復活され、天に昇られ、父なる神の右に座られるまで、キリストが真の救い主であるということを十分に受け取ることができていません。私たちも弟子たちと同じように、聖書に記されている神の言葉は、すぐに分かるものではないでしょう。人間の経験や知恵で掴み取れるものではないからです。

御言葉を、本当の意味で受け取るために、まず求められているのは理解しようとするよりも信頼することです。キリストが救い主であること、十字架による赦しと、復活による新しい命が、この私のためであったと信じて御言葉に向かうことです。

神の国の福音は、理解してから信じる言葉ではなく、信じることによって理解へと導かれていく言葉であるからです。天地を創造され、救い主をこの世界に遣わされた神は、権力や軍勢力、経済力によってこの世界の救いを始められたわけではありませんでした。神は人間の理解を超えて、この世界の救いを成し遂げようとされたのです。救い主は力ある王としてではなく、無力な赤ん坊としてこの世に生まれ、無名の大工の子として育ち、ついには十字架への道を歩まれました。それが神の選ばれた救いの道でした。人の目には明らかな失敗に見えます。多くの人には理解できないことです。しかし神の国の秘密はそこにありました。

神の国の秘密とは、神が私たちの想像する強さではなく、十字架という弱さを通して始められたことにあります。神は力によってではなく、愛と犠牲によって救いを成し遂げられようとされたのです。十字架は敗北ではなく、神が最も深く、最もはっきりと愛を示された出来事です。神の国は誰もがひと目で分かる出来事ではなく、弟子たちの心の中に「ともし火」のように小さな光として始まったのです。遠く離れたガリラヤから語り始められた福音は、時と場所を超えて、今、この地にまで届けられています。

キリストが語られた神の言葉は隠されたままで終わるものではありません。それは、すべての人に届けられるための喜びの知らせなのです。そして、「ともし火」の「光」に照らされる時、私たちがどのように生き、何を恐れ、何を抛り所にして来たのかも明らかにされて行きます。人の目には見えないもの、そして私たち自身が見られたくない、隠しておきたいと思っているものさえ照らし出されます。しかしそれは、私たちが審き滅ぼすためではありません。悔い改めと赦しの中へと私たちを招くためです。

私たちの中には恐れや罪があるのも事実です。けれども同時に、誰にも知られることなく密かに積み重ねられてきた良き業、人目に付かないところで献げられてきた祈り、辛い出来事や悲しい経験を重ねながら、それでも御言葉から離れず歩み続けてきた忍耐、主はその全てをご存知です。キリストはその全てが決して無意味でも孤独でもないと言っておられます。

「ともし火」が照らす「光」は、私たちを審く「光」ではなく、癒しと回復へと導く「光」です。人間の言葉には、人を本当の悔い改めと導く力も、傷ついた心を癒し回復へと導く力もありません。それを可能にするのは神の言葉だけです。だからこそ、私たちはキリストの言葉に聞かなければなりません。

弟子たちへキリストの言葉が続きます。「あなたがたは自分の量る秤で量り与えられる。」私たちは誰もが自分の秤を使って生きています。人の心も、人の愛も、人の親切も、私たちはしばしば相手の立場に立って受け取るよりも、

自分自身の感情やこれまでの経験を基準にして量り、評価してしまいます。相手の思いよりも、自分がどう感じたかを基準に、人の言葉や行いを受け止めてしまいがちです。私ならこうする、私ならこう感じる、自分の「秤」を基準にして他者を理解したつもりになってしまうことがあるものです。

そのような私たちにキリストは、自分がどのような「秤」を使って人を見ているのか、どのような基準で物事を判断しているのかを、改めて問い直すよう促しておられます。「秤を捨てなさい」と言われているわけではありません。むしろ、その「秤」が「自分中心のものであることに気づきなさい」と、語っておられるのです。なぜなら、その「秤」こそが、やがて、自分自身に向けられる「秤」でもあるからです。もしあなたが使っている「秤」が、小さく厳しいものであるなら、その「秤」によってあなた自身も評価され、苦しむことになるのです。自分の「秤」で、全てを量ろうとすれば、神の言葉も限られた自分の知恵や経験の中でしか理解できなくなります。その結果、本当の深い意味を見落してしまうことになるでしょう。

キリストの言葉が続きます。「持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」この言葉も「聞く」ということに深く結びついています。「持っている人」とは、御言葉を聞き、心に留め、それに従って生きようとする人。一方「持っていない人」というのは、御言葉を耳にしながらも、それを自分の生き方と結びつけることができず、聞き流してしまう人の事です。ここで問題とされていることは、御言葉に向き合う姿勢です。御言葉を大切に聞き続ける人は、迷いの中にあっても御言葉を手放さず、その歩みの中でキリストを知っていきます。

『教会』とは全てを理解している人の集まりではありません。キリストの傍に留まり続けようとする人々の群れです。キリストの傍に集まり、キリストが語られる御言葉に静かに耳を傾ける、それが「礼拝」です。『教会』には与えられた課題が幾つもあります。迷いや意見の違い、痛みを伴う出来事もあります。日々、心配や心労を抱えながら歩んでいます。主は、そのような私たちを見ておられます。だからこそ、この朝も「聞きなさい！」と語りかけてくださるのです。

主の言葉に聞き従うとき、そこに見えてくるものはキリストの十字架と復活によって既に実現している神の国の「ともし火」です。「ともし火」は燭台の上に置かれてこそ初めてその光が周りを照らし役割を果たします。神の国の福音は、『教会』が迷い揺れているときにこそ、決して隠されてはならないものです。

この礼拝堂の屋根には十字架が掲げられています。私たちは週の初め毎に十字架の下に集められ礼拝を献げています。キリストは、「ともし火を燭台の上に置くように」と語られました。「燭台」とは『教会』であり、私たち一人ひとりのことです。主が灯してくださったこの光は、弱さを抱えたままの私たちを、闇を照らす光として用いてくださいます。

主の言葉に聞き従い、信頼して「ともし火」を掲げて、夫々、主の示される場所へ遣わされて参りましょう。お祈りを致します。

聖なる神、罪の器に過ぎない小さな私たちを、あなたの恵みがどれほど豊かに満たしてくださるのかを御言葉によって示して下さったことを感謝致します。どうか、この恵みによって私たちが悔い改め、あなたの下へ真実に立ち返ることができまようように。私たちの願いや思いを遥かに超えて守り導いてくださるあなたの御手によって、私たち一人ひとりをあなたの

福音を証しする器として用いてください。

主イエス・キリストの聖名よって祈ります。アーメン。

讃美歌：こどもさんびか 121 (『21』 509「光の子になるため」)

献金・感謝の讃美歌：65-2「今ささげる」

感謝の祈り：神さま、今日は礼拝に招いてくださってありがとうございます。みことばを感謝いたします。この一週間をイエスさまと共に歩ませてください。このお祈りをイエスさまのお名前をとおしておさげいたします。アーメン・ 主の祈り

派遣：こどもさんびか 32 (『21』 46「すべての人よ」)

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：週報記載『チャリティコンサート』チケットの販売案内と伝道のツールとしての活用要請。

後奏：「神のみ子は来ませり」(G.F. カウフマン)